

＜実践例＞〔久保良宏(2020). 分割問題における大学生の批判的思考に関する範例に注目した考察. 日本数学教育学会第8回会春期研究大会論文集より〕

【バレーボールの勝敗】…球技の勝敗の妥当性

1. 教材開発の背景

スポーツの勝敗の決め方は多様である。球技に着目すると、野球やバスケットボール、またサッカーやラグビーなどは合計点で勝敗が決まるが、バレーボールやバドミントン、卓球などは、セット数で勝敗が決まる。

後者のセット数で勝敗が決まる球技は、ネットを挟んで行われ、自陣と敵陣で動くことができる範囲が分かれており、競技者の直接の接触がないスポーツのようである。

スポーツの勝敗は、得点や失点などの数値によってなされることが多いが、その数値が上記のように合計点によって判断されるか、セット数で判断されるかは、得点という数値の価値に関係する。

「バレーボールの勝敗」と題したこの教材では、スポーツの勝敗の判断が、このようなルールによってなされることを批判的に考察させてはどうかとの考えに立っている。

これは、私たちの生活の中に見られる「きまり」や「システム」が妥当であるかについて考えることにつながるのではないかと考えている。

2. 教材について

獲得したセットの数で勝敗が決まる「バレーボール」に着目し、「バレーボールの勝敗の決め方は妥当か」について考察させる。

右は「バレーボール」の全日本選手権準決の結果（2010.12.20の朝日新聞の記事）である。女子準決勝の「デンソー」対「JT」に着目させ、「セット数ではなく得点の合計で勝敗を決めるルール（システム）にした場合、デンソーではなくJPが勝者となる」という考えを生徒に提示する。球技の勝敗は数値によって判

東 レ 3	デン ソー 3	▽女子準決勝	1 サ ン トリ 3	J T 3	▽男子準決勝
252525	25251325		1517252520	1525182523	
211817	20212523		1325191925	1323252325	
0	1		2	2	
久 光 製 薬	J		ツ グ ナ ソ ニ	堺	
	T				

断されるが、その数値の扱い方や解釈は妥当といえるかといった点についての考察である。

3. 授業実践

中学校における授業実践では、当初はバレーボールを含めスポーツに関心がない生徒は、活発な活動は見られなかったが、授業が進むにつれて生徒間での議論がなされると、次第に興味を示していった。野球を例に、「野球が合計点ではなく、9回の対戦をバレーボールのようにセットで考えたかどうか」と問いかけたところ、「それではおもしろくない」、「9回の逆転ホームランはない」といった意見が出された。

しかし、バレーボールを合計点で考えてみるということに対して、生徒からは「確かにこのような考え方もある」といった意見も出された。しかし、スポーツにはルールがあり、バレーボールのルールに従えば、合計点で勝敗を決めるのはふさわしくないといった考えが大勢を占めた。

そこで、バレーボールのルールは、ここ数十年でかなり変わっているのではないかと問いかけたところ、「ルール変更にはそれなりの理由がある」との発言もあり、ルールを変更することには意味があるが、現在のルールがその時代のもっとも意味のあるものとの解釈であった。

決まりやシステムを批判的に考えようとする姿勢は見られたものの、生徒の意見は、「そこにはそれなりの理由がある」という認識であった。